

福田晃・渡邊昭五編

『伝承文学とは何か』

常光徹

本書は、十三名の執筆者が掲げるつぎのテーマから構成されている。

「伝承文学」とは何か

伝承文学の分類—日本文学の発声と
口承文学へウタ／の成立
韻文文学へカタリ／の成立

かかわって—
古橋信孝
岩瀬博

福田晃

大島建彦

美濃部重克

松前健

高野聖

福田晃

『泉鏡花』

『高野聖』

『大島建彦』

『美濃部重克』

『松前健』

それぞれの執筆者が論じる多様なテーマ
は、口承文学と書承文学が織り成す広大な世
界の奥行きを物語ついてる。

福田氏の「『伝承文学』とは何か」は、はじめて、柳田国男と折口信夫の「伝承」観を立したものであり、その深層には、この口頭伝承の世界（口頭伝承の世界）を母胎として成立する。その結果、「伝承」に対する二人の関心の所在は異なるが、「伝承」そのものの語義については大きなちがいは認められない。柳田国男と折口信夫の「伝承」観を比較する。その結果、「伝承」に対する二人の「言語表現」が息づき続けてきたと言えるであろう。その「言語表現」の深層にまで及んでいる「口頭伝承」の伝統を総称して、『伝承文学』を称するのはいかがであろうか。つまり、「伝承文学」の呼称は、狭義では現

しているようである」と述べ、そこには、伝承における変容の視点が欠けているのではないかと指摘し、つぎのように言う。

「変容については、柳田氏にしても折口氏

にしても、民俗学の立場からは重視するところではない。しかし、その変容が、たとえ意

識的であっても、かの伝承社会において公認されてきた側面のあつたことが考慮されるべきではないか。あるいは、それが「古代」の

伝承であろうと、現代の「民俗」であろうと、そこにささやかな創意が認められていたのだ

と言いかえるべきかも知れない。その「創意」が、一面では、「伝承」の力となつていい

たというのである」

「伝承」についての認識を示したうえで、つぎに「伝承文学」の定義に及ぶ。

「文字言語」による創造的な「文学」は、その世界（口頭伝承の世界）を母胎として成立する。その世界（口頭伝承の世界）を母胎として成

伝承文学と芸能—能楽資料としての逸話—
天野文雄
伝承文学の在地性
伝承文学と歌謡—「忘れこやすんな」
の系譜を例として— 真鍋昌弘
伝承文学と絵画—来迎図の構図史
とその背景の思想— 渡邊昭五

代にまで及んだ『口承芸芸』を言い、広義では創造的『文学』に沈潜する『口承表現』をも含んだものとみるのである」

従来、文字表現に対する口承表現という意

味で一般に理解されがちであった「伝承文

の交錯する領域を加えること、つまり、現

その交渉のなかにこそ大きな意義のあること

を明確に主張している。文字表現による文学

は、これをさらに「口承表現の要素が稀薄で、

表現の要素が濃厚で、想像的・創造的側面を強調する。これは主張しないものと二分されて、前者は「讀物」、後者は「文學」である。

者を「文学」、後者を「文学伝承」と称して

口承文学についても「非文学伝承」といふ。

「民間文学伝承」に分けるが、ただこの分け

方は抽象的で福田氏も言うように実態概念に

よるものではない。

本論はまさに「伝承文学とは何か」を正面から問うることで、これまで愛昧な受け止

められかたをしてきた「伝承文学」の範囲を

規定しようとしたものである。とくに、口承

と書承の複合する領域を重視し、「『文字言

語』の流行する時代における『文字表現』の

「口承表現」に影響を及ぼした側面を論及する研究はきわめて稀である」との発言は、柳田以降の民俗学的な傾向に対する鋭い批判である。ただ、柳田の「伝承」観について、「先行の文化をそのまま受け継ぐこと」との理解には再検討の余地があるようだ。

古橋氏は「うたわないのになぜ歌」というか」と、自ら投げかけた問いに「歌は言葉の意味以外の働きに価値を見出し、それを言葉以前として抱え込むことによって成立し、これこそがへうた▽だと名のつたものである」と答える。このことは、歌によって、言葉で表現することのむつかしいへうた▽の性格、旋律やリズム、発声や動作など、音楽的な、あるいは身体性にかかることがあるからを逆にあげるだす。「文学に重点を置かずに、言葉を音声や所作と同じレベルにみなすことによつて、初めて口承文学を考える意味があるはずなのだ」との発言は、ともすれば、言葉のみが強調されがちな「口承文学」の陥りやすい一面をついている。口承文学という「書き言葉以前を抱えた文学」を考えるとき、たえず「口承とは何か」という根源的な問いに立ち返る発想の大切さを感じる。

松前氏は、歐米における口承文化研究の現状を紹介しながら、とくに、近年注目されるようになったオーラル・コンポジションに関する研究の重要性を説く。オーラル・コンポジションについては「現存する生きた語り手たちの演技と表現の中に、古くからの大筋や、表現形式を踏襲しながらも、その場の環境に応じて、演技中に、即座に、細部のエピソードを適宜插入し、新しい物語りを創作するのであり、語り手の人気は、そうした個人的な天分如何にかかる」ということなのである」と説明している。話の大筋や韻律を踏まえたうえで展開される語り手の創作や演技が聞き手の感動を呼ぶ。口承芸芸の特性と考えられてきた非個�性や非文学性は見直しが迫られているという。

こうした視点からの研究が、わが国ではほとんど見られない」と述べ、「日本の從来の研究者たる筆者が、書承、口承のさまざまな伝承の話根・話型の異同や、それらの系統づけ、新旧の序列づけなどにはかり興味を持ち、それらの語り手や歌い手の個性と、語りかたの関係への考察を軽視していたからであろうが、また一つには、とかく日本の民間伝承の研究者は、歐

